

アジア未来学校 2 周年報告会

もとカンボジア事務所所長 安田理裕

5月22日(日)に、「アジア未来学校2周年記念報告会」が開催されました。残念ながら、今回出席予定だったカンボジア事務局現ディレクターのポット・リテイ氏は来られなくなってしまいました。2年間カンボジア事務局長を務めた安田からアジア未来学校2周年記念として、カンボジアの紹介、日韓アジア基金の活動の経過、およびその成果が報告されました。

紙面の都合上そのすべてを記載することはできませんが、報告会の内容を一部割愛して紹介します。

カンボジアはタイとベトナムの間にあり、面積は日本の2分の1、人口は10分の1です。国教は上座部仏教で、人口の8割が農業に従事する、いわゆる農村型社会と言えます。カンボジアの戦後の歴史は以下のとおりです。1953年にシアヌーク国王の下で独立しますが、中国の60年代の情勢に連動してカンボジア国内の経済状況が悪化し、内戦が勃発しました。皆さんもご存知とは思いますが、1975～79年には、ポル・ポト政権の下でクメール・ルージュ（いわゆるカンボジアの文化大革命）が起こり、とくに宗教や行政組織が否定されます。この間、100万人以上（当時の人口の7分の1とも言われる）が虐殺され、中学校の先生は8分の1に、小学校の先生は10分の1になりました。1979年にベトナム軍がカンボジアに侵攻しましたが、79年から91年の間は国内情勢が不安定なままでした。92年から2002年までの間にUNTACによる選挙など、数回の選挙が行われましたが、97年までは内戦状態が続きました。2004年夏に組閣された現内閣は人民党とフンシンペック党の連立政権です。

カンボジアの教育事情についてですが、成人（15歳以上）識字率は、68、7%です。就学率は9割と言われていますが、実際に学校に通っている子どもは6割くらいだと推定されています。2001年の調査では小学校6年生まで進級する児童は48%で、退学率や留年率が高いようです。この背景には、もちろん経済的な事情もありますが、留年率が高い中で子ども自身がかっこう悪いと思って退学するケースや、クメール・ルージュを体験した親の世代が、当時教育を否定されていたこともあり、教育に関心がないという事情もあるようです。

日韓アジア基金の活動の経過、および成果については、2003年3月にアジア未来学校開校当初は、100名ぐらいの生徒がいました。1クラス25名で1日4回の授業（1回2時間）が行われていました。授業のカリキュラムは子どもたちの学力に合わせて実施しています。2003年10月には約15名、そして2004年10月には約50名が公立のルセイサン小学校へ行けるようになりました。現在は、45名ほどがアジア未来学校で勉強しています。わたくしは、アジア未来学校は、当初から目的としていた、子どもたちが公立の小学校へ行けるように育つための滑走路の役割を充分果たしていると喜んでおります。

カンボジアは、現在では、WTO に加盟したり、空港も立派になったりと発展していますが、明るい材料だけではありません。1日2ドル以下で生活している人の割合は、1990年で85%、2005年で78%で、他国と比較すると、インドネシアでは90年72%、05年45%、ラオスは90年88%、05年73%、中国は90年70%、05年32%となっています。また、カンボジアにおける退学率は、2003年が30%、2004年は35%と増加しています。

なお、今後は、カンボジアのローカル NGO「ポンロック・タマイ」がリティをディレクターとする体制でアジア未来学校を運営していくこととなります。今後ともご支援よろしくお願いたします。



松田事務局長の挨拶



2周年の報告をする安田君

追記 この報告会にはケーブルテレビ局の取材がありました。元NHKのキャスター藤田太寅さんが司会をつとめる番組の「私のセカンドステージ」のコーナーに、当基金の江本代表理事が取り上げられたからです。このコーナーは、定年退職した方々のその後の生き方を紹介するもので、全国のケーブルテレビ160局余りで放映されています。インタビューで江本さんは「在職中にインドネシアの水力発電所建設に7年間余り従事したこと、その時見聞きした貧しいアジアの子ども達のために、退職後少しでも力になりたいと思ったこと、禹さんの活動を知りその理念に共鳴してこの基金に参加したこと」などを話されました。



番組は、このインタビューに、報告会の模様やアジア未来学校の授業風景などを盛り込んで6分ほどにまとめられ、6月18日から全国で放映されましたが、さっそくテレビを見た福岡県の方から協力できることはないかという反響もありました。

カンボジアの教育とアジア未来学校

—ごあいさつにかえて—

ポット・リティ

皆さん、わたくしはこれまで2年半にわたり日韓アジア基金カンボジア事務所アジア未来学校の活動に携わってきましたポット・リティと申します。この度、アジア未来学校の運営は、日韓アジア基金カンボジア事務所から、新たに誕生す

る現地NGO、ポンロック・タマイ（新しい芽）の手に移ります。わたくしはその代表として、引き続き学校運営に関わっていくことになりました。

寺院での教育から学校の設立へ

カンボジアにおける教育は、従来寺院で行われていました。そこでは、クメール語、歴史、社会、倫理などが教えられ、カンボジアにおける寺院は伝統的に仏教の信仰の場以上の役割を果たしてきたと言えます。フランス植民地時代にもこのような寺院における教育は続けられ、1940年代には3年制でおこなわれていました。‘47年には、クメール語をアルファベット化しようとしたフランス政府に対する反対運動が起っています。’53年の独立以降も、こうした寺院における教育は続けられていました。一方、いまのような学校が徐々に設置されはじめ、そうした学校では6年制がとられていきました。‘60～’75年には徐々に教育制度が整い、12年制の教育が広まりはじめて、教育の質自体も東南アジアにおいて他のどの国にも引けを取らないレベルにありました。こうした背景には、12年制など独立後にもフランスの影響が強く残ったこと、また独立後、カンボジアが比較的安定した社会発展を遂げていたことが挙げられます。女子は家で家事を手伝うべきだという伝統的な考え方から、‘50年代までは女子が学校に行くことは稀でしたが、’60年代以降は学校へ通う女子の数も大幅に増えたと言われています。

「暗黒の時代」

こうした状況が変わったのは、1975年から1979年までの「暗黒」の時代でした。この間、急進左翼のクメール・ルージュがカンボジアを支配し、市民を街から追い出して田舎へ送りました。活気のあった街は亡霊の街と化し、それまで築き上げられた教育制度もほぼ皆無になるほど大きく荒廃しました。学校は刑務所、武器庫、牛舎などとして使われ、寺院も処刑所などとして使われていたのです。その最たる例が、プノンペン市内に今も残るトゥールスレン博物館です。この博物館はその昔エリートを育てるリセ（フランス式の中等高等学校）でしたが、クメール・ルージュの時代には収容所として使われ、その記憶を留めるため今博物館になって当時の状況を伝えています。この時代、子どもたちは当然学校へ通うことはできず、強制的に農作業を強いられていました。クメール・ルージュのリーダーであるポル・ポト自身はフランスに留学して高い教育を受けた人間でしたが、かれやオンカーと呼ばれるクメール・ルージュ指導部は教育のない人間や子どもたちほどコントロールし易いことを知っていたのです。（訳者注：教育のある人間はクメール・ルージュから敵視され、虐殺の対象となっていました。）10～15歳の子どもたちは武器を渡され、兵士になりました。オンカーはそうした子どもたちに人を殺すことを命じ、ときには自分の家族すらオンカーに歯向かう者として殺させたのです。

個人的な話になりますが、わたくしはその当時10歳で幸い兵士にならずに済みましたが、同じ世代の子どもたちと同じような惨めな暮らしを強いられていました。当時、わたくしが書けた文字は、母が教えてくれた自分の名前だけでした。

教育の崩壊から再生へ 非正規教育の実施

1979年、ベトナム軍の侵攻によりクメール・ルージュ政権は崩壊しましたが、先に述べましたとおり教育制度は崩壊しており、教育は新政府の最重要課題の1つとなったものの、そこからの復興は教室不足、教員不足、教科書不足など大きな問題を乗り越えなければならない非常に困難なものでした。

復興当初、プノンペン市内には5年制の学校がいくつかあるだけでしたが、その後、徐々に全国に広がり始め、10年制にまで制度上は拡大していきました。こうした公立校は基本的には全ての子どもに開かれていましたが、実際はすべての子どもを教育できる規模ではありませんでしたし、クメール・ルージュ時代に教育から遠ざかってしまった人たちは、きちんとした教育を受ける機会には恵まれないまま仕事を始めてしまうのがほとんどでした。こうした点から、政府は非正規教育（訳者注：「ノン・フォーマル・エデュケーション」の和訳。公立小学校、中学校などで行われる正規教育と対をなすもので、具体的には職業訓練、識字教育などを指すことば。）の実施という方針を打ち出しました。教育を受けないまま仕事を始めてしまった人たちは、仕事の後などにこうした非正規教育の識字学校の授業へ通うようになったのです。この制度は国中に広がり、多くの人が識字学校へ通いました。わたくしもそんな学校に通った人間の1人で、昼は生徒、夜は下のレベルの生徒を教える教師をしていました。この制度は‘80年度に入り一旦終わりましたが、’90年代にはまた再開されました。

このような過去を振り返って、わたくしは現在カンボジアにとっても最も必要なものは教育だと思います。多くの国が第二次世界大戦で多くの被害を被り、その後復興を遂げてきましたが、やはりそこでも重要な鍵となったのが人材の育成であったと思います。わたくしが留学していたロシアや、日本、韓国もそのような国の代表だと思います。これらの国においては、人を育てることが国の重要政策となり、その結果復興を遂げてきたのではないのでしょうか？

教育の重要性と皆さまへの感謝

クメール・ルージュ政権が崩壊してから、ある程度の状況までに復興するのに20年という歳月を要しました。（訳者注：クメール・ルージュ政権崩壊後も安定政権は生まれず‘90年代まで内戦が続きました。また、知識層が虐殺の対象になったこと、生き残った者も難民として海外へ出たことから、深刻な教師不足がありました。）しかし、残念なことにカンボジアは未だ貧しい国で、社会はいまだに大きな不安定要素を抱えています。海外からの支援を受けて公教育の復興が進められてきましたが、未だにすべての子どもたちに教育の機会があるという状況からほど遠いものです。こうした状況の中で、カンボジアがしっかりと自立できる国になるためには、まだまだ教育が重要な役割を担っているのです。

こうしたカンボジアの歴史、そして個人的な生い立ちを考えたとき、私が日韓アジア基金／ポンロック・タマイのアジア未来学校において、自分のこれまでの経験を生かし、カンボジアの教育に微力ながら貢献できることは非常に光栄だと感じます。開校から2年を過ぎ、これまで多くの子どもたちが未来学校で学び、

そしてルセイサン小学校へと旅立って行きました。この結果を私はとても嬉しく思っています。かれらが自分たちの可能性を信じ、行けるところまで行って欲しいというのが、いまの私の願いです。

アジア未来学校の成果を語る時に忘れてはならないことは、こうした素晴らしい結果の背後には日本、そして韓国の支援者の皆さまの存在があるということです。皆さまの暖かいご支援なしには、この子どもたちが学校へ通うことはなかったことを考えると、皆さまのご支援の意義はとても大きなものだと感じます。アンロンコン・タマイ村の住民に代わり、カンボジア国民の1人として、そして子ども時代に教育で苦勞させられた人間の1人として、あらためまして日韓の支援者の皆さま、そして日韓のスタッフの皆さまに感謝の意を述べたいと思います。信じて下さい。この学校がこの村の人々にとって持つ意味はとても大きなものなのです。

補足的にわたくし個人に関する話をさせていただこうと思います。わたくしは1969年、プノンペン郊外で生まれました。クメール・ルージュから解放された‘79年に学校に入り、’87年に高校を卒業、その後ソ連に留学して‘94年に大学を卒業しました。ソ連では機械工学、特に食品産業機器について学び修士号を取得しました。この度、わたくしを日本にお招きいただき、日程調整など尽力いただきました日韓アジア基金日本事務局スタッフの皆さまに、厚くお礼申し上げます。今回は書類上の都合で報告会に参加できませんでしたが、いつか支援者の皆さま、そして日本事務局スタッフにお会いできることを、そして日本という美しい国を訪れることを心から強く望んでおります。最後にもう一度、日韓の支援者とスタッフの皆さまに心からお礼申し上げます。

オーケン・チュラウン（ありがとうございます）。 （原文英語 訳：安田）